

(200)

印度學佛教學研究第 57 卷第 2 号 平成 21 年 3 月

プトガラの運命 ——『俱舍論』を中心として——

飯 岡 祐 保

はじめに

『俱舍論』の「破我品」は、そのチベット訳からの和訳と英訳が、既に知られており、サンスクリット原典からの村上真完（以下敬称略）訳も揃った。その内容は、桜部建「俱舍論における我論」として、“その破我はいわゆる補特伽羅にほかならない”と説かれている。このプトガラ（略号 P）の教義上の問題点を扱ったものは、広く有部經典の歴史の中から考察した高崎直道「諸法無我考」を始めとして、なかでも武田宏道「実我否定にともなう行為主体の問題」は「破我品」を中心として、行為主体を世親の“あるものがあるものに対して最勝の因であれば、そ〔の前者〕はこ〔の後者〕の行為者である”とする、「前後」による連続状態（saṃtāna）の考えを紹介している。また、同「犢子部のプトガラ説」（龍谷大学論叢第 451 号）は、それによる部派仏教の解明を願い、同「世親の実我說批判」（同論叢第 456 号）は、“実我に執すれば有身見に陥る”，“我と称されるものは五蘊相続そのもの”と伝えている。また、この五蘊相続をテーマとしたものには、佐古年穂「無我における個体の連続について」がある。

第九章の冒頭で、無我說以外に解脱は無いと言われて、P は追放の運命に見える。世親の P の捉え方、五求門破による論証、引用經典の扱いが、調べられる。

1. P 説

イ) 犢子部（vātsīputrīyāh）の説

「実体でも、表示されたものでもなく、内部に構成され、生きている現在の身心の構成要素の束（skandha 略号 S）を材料として（要約）AKbh（以下省略）.p.461¹⁸⁻¹⁹」P の表示がある。この P を不常不断とも（p.462³⁻⁴）言う。

これに対して世親は、言う。

「複数の色や形を原因として牛乳、或いは、水を見分ける_E ならば、・中略・牛乳、或い

は_E, 水の俱生体 (samastāni) と表示される如く, S が P であることが成立する. p.463¹²⁻¹⁶」

ロ) 有部の説

では、人である事の確認の説明は、どのようにされるのか。

「眼を原因として色や形 [を条件として] 視覚が生じ、三事（眼・色や形・視覚）が和合して接触作用となり、接触作用とともに生じている、感受作用・表象作用・思う事（形成作用・認識作用）のこれら四の S と眼と色や形とだけで人である（要約） p.465¹⁰⁻¹²」

この複雑な説明に対して、世親は言う。

「感覚機能と対象とがあって、知覚作用がなくても、知覚作用があれば、感覚機能と対象はある。三つが説かれて、さらに接触作用の把握の無意味さになる。（要約） p.143¹⁴⁻¹⁵」

この「無意味さ」とは、何を言っているのだろうか。三事 and 合とは、身根と、接触されるもの (spraṣṭavya) とで接触作用 (sparśa) が生じる。しかし、その三事 and 合が接触作用となると、接触作用の二重作用になることを指している。

S と俱起している接触作用には諸説があるが (p.143⁶⁻⁷, p.143⁷⁻⁸, p.143¹⁰⁻¹¹), いずれも、世親から見ると、接触作用の二重作用である。世親は「生じたものが更に生じるのは、無窮の誤り p.138¹⁰⁻¹¹」としている。

「この時の接触作用となる知覚作用があるとしても、感受作用はないし、また先に知覚作用はその感受作用であるから、接触作用はない。 p.145²³-146¹」

従って、この「人」と呼ばれる有部の P は、世親にはありえないことになる。次に、「S が P である」という世親の考えが検討される。

2. P と S の関係

P と S との関係を一四句分別に整えると、第一句, P は S とは別の常見であり, 「[P] は [S とは] 別なのである。別々の時間のことだから (要約) p.462¹⁰」である。第二句, P は S とは別でない断見であり, 「それらは瞬間毎に前になかったものが、生じているだけ p.469¹⁻²」である。第三句, P は S とは別であって、別でない。前になかったものが生じている各瞬間は、別々の存在である。しかし、瞬間の前後は、繋がっており、それは「別であって別でない」。第四句, P は S とは別でなく、別でないのでもない不可説で、犢子部の考え方である。

すると、第三句, 「S とは別であって、別でない」 P は、世親の考え方となろう。第三句には、P 否定の根拠である恒常性がない。

一方、“実我に執すれば有身見に陥る” という有身見は、どう説明されている

(202)

プトガラの運命 (飯 岡)

だろうか。我執は、「滅する (／ sad) 身体が [我がものであると言う考え方で] 五つの S を [我がものとして] 取る p.281¹⁹⁻²⁰」ことである。この有身見は、サンユッタ・ニカーヤに見られる。

「色形あるもの (身体) をアートマンであると認め、色形あるものを持つものをアートマンであると [認め]、アートマンの中に色形あるものを [認め]、あるいは、色形あるものの中にアートマンを [認めている]。感受作用を……認識作用をアートマンであると認め…… [これが] 有身見です。(要約) SN.1.13」

漢訳：「見色是我異我 色中我我中色 受想行識 見是我識異我 我中識 識中我
長者見名身見 大 2.151a23. 雜阿卷 21.」

となっている。漢訳はこれに所有関係を加え、パーリは異我を加えると五求門破に通じる。それは、火と薪の例えの P と S の関係、「基づいて (ālambana)_E」, 「材料として (upādāya)」, 「原因として (pratītiya)」, 「依り所とし (āśraya)」, 「共にあること (sahabhūta)」に表現される。

イ) 同一関係 (tattva-ālambana)

P と S が同一の場合、S が生滅すると、P も生滅する。火と薪のように。

「炎に包まれ、熱くなり、だんだん頂点にくるそれ (火) によって、それ (薪) は点され、また、燃やされる。連続状態の変化を自分のものとしているからである。p.462⁸⁻⁹」

火と薪は「別であって別でない」。燃える前と、燃える後の区別を含んだ同一関係である。「S に基づいて_E」ならば、色等に基づいて、それらだけを指して牛乳が表示されていること(要約)p.461²⁰⁻²¹」に当て嵌まる。「牛乳がヨーグルトからチーズ、それからバターと [変化する] ように p.462⁹⁻¹⁰」それぞれの現れ出ているもの (sam-ut/i) の集合体がある。ヨーグルト、チーズ、バターと別々なものの別でない一つ (牛乳) である。この P は断見でなく、変化は受容される。

ロ) 別異関係 (anyatva-sahabhūta)

取る者 (upādātṛ) と素材 (upādāna) は、一方がないと他方もない。別異関係では、S がないと P もない。「木切れ等が燃える場合に、熱性があるのは火で、共に生じている三大種 (地水風) は、薪 p.462¹¹⁻¹²」では、別の二つが、同時にある。薪が熱くなるのは「[火とは] 別の大種が固有性の薪は、無熱。熱さと結びつけば、熱いことが成立。(要約) p.462¹⁹⁻²⁰」熱性の同時存在が、燃える現象である。

ハ) 外延関係 (ādhāra-upādāya) と内包関係 (ādheya-pratītiya)

二つのものが他を拒んで、含まれているとか、含んでいる関係はない。

「それ (P) が S を材料として、どのように表示されているのか。P そのものが、その材料となるものになってしまう (要約) p.463⁴⁻⁵」

炎が、薪を包む。P が材料である S を包む。「材料として」は、外延関係である。

「また、二つのもの (火・薪) は八実体 (地・水・火・風・色・香・味・触) である。その薪を原因として火が生じている。p.462⁹」

この「原因として」は内包関係である。

ニ) 所有関係 (tadvat-āśraya)

これは、同一か別異の関係である。この二つは不成立で、これも同様である。

「これらが、絵や棗の実等のように置かれるもの、壁や壺等のように置くものであるのは、正しくない。妨げるものと分離との過失があるからである」_E. p.475¹¹⁻¹²」

棗の実は壺に持たれている。壺を依り所にしている。絵は壁を依り所にし、壁に持たれている。所有関係は、依り所に当たる。

世親の捉えている P は、色・受・想・行・識の別々の S が瞬間毎に現れ出てくるもの (samut/i) の集合体 (samudāya) であり、変化し、恒常性がない。それは、S を変化しないアートマンと愛執する苦悩の原因を消去する、無我の論証である。

3. 引用経典の問題

P 主張のヴァーツヤ経 (p.471¹⁹⁻²¹) は、サンユッタ・ニカーヤにある。

「ヴァッチャよ。ある時、この身体を捨てて、また、人は、未生の別の身体を得る。私はそのことを、愛を取ってと言う。S N.44.7.15」

漢訳：「佛告婆蹉 衆生於此处 命終乘意生身 生於余处 当於爾時 因愛故取 雜阿第 34. 大 .2.244b3-4」, 「犢子梵志 (a13) ……身死於此 意生於彼 於其中間有誰為其取 佛言当於爾 時以愛為取 愛取因縁 衆生受生 別訳雜阿第 10. 大 .2.443b3-7.」

両漢訳には、「意生身」, 「中間有」がある。これが、P 主張の根拠であろう。

「[P] は誤見で、証明ではない。(要約) p.471¹⁸⁻¹⁹」と世親は教証と認めず、犢子部と正反対の立場である。「取る」ことの否認 (p.468²²⁻²³) と、「瞬間毎に前に無かったものが、生じている」と P を説明する。(p.468²³⁻⁴⁶⁹)

また、重荷の教証もある。

「“重荷について、重荷を取ること、重荷を捨てる事、重荷を運ぶ者について、私は説く

(204)

プトガラの運命 (飯 岡)

であろう。”重荷と同じものが、重荷を運ぶ者とは、筋が通らない。(要約) p.468¹⁻³」, 「S は、前の S が後の [S] に対して、傷つける事を生じていることが、重荷と重荷を運ぶ者と言われている。重荷とは、苦しみを与えるものと言う意味である。(要約) p.468⁵⁻⁸」

バーラ経は SN. にある。

「重荷について、重荷を運ぶものと、重荷を取る事と、重荷を捨てる事について (要約) SN.22.22.3」

「重荷を運ぶものとは何か。プツガラがそうです。(要約) SN.22.22.5」

漢訳：「我今當説重擔 取擔捨擔 擔者 大 .2.19a16-17」, 「我今當説擔 亦當説持擔人 亦當説擔因縁 大 .2.631c12-13」 「所謂持擔人者 人身是也 大 .2.631c19-20」

「前の S が後の [S] に対して、傷つける」という「前後」が、挿入されている。

まとめ

「前後」は「別であって別でな」く、あの S と P の関係の第三句を示し、第一、二句の常・断見を包摂し、第四句の犢子部の説を退けている。過去から見るか未来から見るかで、現在がそれぞれの「前後」の時間差の“五蘊相続そのもの”になる。そこに恒常性を求めれば、苦悩が生じる。「全ての煩悩はアートマン (恒常性) への執着から (要約) p.461⁴」と言われ、それは因果関係でもある。「表示される存在の P は流れと積集のようなものである。p.467¹¹⁻¹²」流れ (生滅の前後差 pūrvāparaviśeṣa p.77⁶) となり、S の連続状態になっている。

Akbh : Abhidharmakośabhāṣya of Vasubhandhu ed. by P. Pradhan, Patna, K. P. Jayaswal Research Institute, 1975. SN : The Samyutta-nikāya ed. by L. Feer, London: The Pāli Text Society, 1884-1898. 大 : 大正新脩大蔵経. E : The Textcritical Remarks of the Ninth Chapter of the Akbh. by Ejima Yasunori, 『仏教文化』第 17 巻, '87.

〈キーワード〉 プツガラ, 犢子部, 身心の構成要素の束 (skandha), 五求門破

(東京大学大学院修了)